

フリードリヒ・シュペーのこと (1)

東洋宣教に憧れたイエズス会士

横 塚 祥 隆

(1)

「ヴェストファーレンの国中を席卷した戦いは、10年以上も凄まじい勢いで荒れ狂ったのち、東方の海辺にいたってようやく衰えを見せるかのようだった。プロテスタント側の主張をもっとも勇敢に擁護したクリスティアン・ハルバーシュタットとエルンスト・フォン・マンズフェルトはとうに大地に伏していた。大地は騎馬の蹄と傭兵たちの足下で久しい間うちふるえていた。」^①

このようにラインホルト・シュナイダーの短編小説『慰める人』は書き始められている。三十年戦争という政治的であり、宗教的様相の濃い戦乱の時代に、決して長くはないが波乱に富んだ生涯を送ったフリードリヒ・シュペーの生涯を約半年と思われる短い期間に集約して描こうとしたものである。シュペーは対抗宗教改革の尖兵として、聴罪司祭として活動し、魔女裁判を舌鋒鋭く批判し、またバロックの詩人としても文学史に足跡を残したイエズス会士である。筆者の目論見はシュペーの生涯と業績の紹介を兼ねて、その活動の軌跡を16世紀末から17世紀初頭のノルトライン・ヴェストファーレン、あるいはケルン、パーダーボルン周辺の主として宗教的変動の中でたどってみることにあるが、本稿では2篇のフランシスコ・サヴィエルを歌った詩を取り上げて宣教師としてのシュペーの情熱のありようを瞥見したい。まずはその生涯を事典風に記しておく。

フリードリヒ・シュペーは1591年2月25日デュッセルドルフ近郊のカイザースヴェルト^②に生まれる。父ペーター・シュペー・フォン・ランゲン

フリードリヒ・シュベールのこと (1)

フェルト^⑧はその父（シュベールの祖父）を継いでケルン選帝侯に仕え、カイザースヴェルトの宮内官職を務めていた。男2人女2人の兄弟姉妹があり、フリードリヒが祖父の名を継いでいるので長男だったと推測されている（エッセルババの小説では末弟とされている）。1601年ケルンのイエズス会経営のギムナージウムで学ぶ。09年ケルン大学学芸学部でバカロウレウスとなり、翌年トリーアでイエズス会入会、修学修練士となる。以後27年に修練期を終えるまで、ヴェルツブルク、マインツの大学で哲学、神学を学び、シュパイア等でイエズス会ギムナージウムの教師を務め、宣教師としてインドへの派遣を総長に願い出るも認められず、22年司祭叙階ののちパーダーボルン大学哲学教授、同時に聴罪司祭、更に周辺地区のプロテスタント貴族の間で宣教活動。28年以降もケルン大学で教壇に立ち、またケルン、パーダーボルンの修道会管区でカトリック化宣教に従事したが、ヒルデスハイム教区内の小村に赴く途中何者とも知れぬ騎士に襲撃され、瀕死の重傷を負う。また30年修道会上長の不興を買い、教育職を解任されることもあったが、間もなく総長の措置によりケルン大学に復職。32年以後トリーアに派遣され、35年同市での皇帝軍＝スペイン軍とフランス軍との間に交わされた市街戦に際して傷病兵の看護に従事し、ベストに罹患。それがもとで同年8月7日死去。

シュベールの文筆活動に関しては、23年ケルンで刊行された『カトリック聖歌集』に収録された100篇を越える歌がシュベールの手になるものとされ、31年魔女裁判批判の書『犯罪に関する注意書』が著者の関知なしに出版された。死後刊行された修養書『黄金の徳の書』と霊的詩集『勇敢なナイチンゲール』は、シュベールが宣教に従事しながら、書き留められたものと推測されている。

フリードリヒ・シュベールがその生涯の大半を過ごしたノルトライン・ヴェストファーレン地域は、彼が生まれた頃にはすでに新旧両信仰の抗争の舞台になっていた⁴⁾。ケルン選帝侯でカトリックの大司教であったゲーブハルトは1583年にはケルン公領のヴェストファーレンを放棄し、そこに宗教改革を導入、教皇によって破門され、いわゆる「ケルン戦争」⁵⁾後に市から追放され、宗教改革開始後間もなくルター派に移行していたパーダーボルンに一時逃れた⁶⁾。しかしディートリヒ・フォン・フェルステンベルクがパーダーボルンの領主司教になり（1585—1618）、1604年に同市をカトリック化すると同時に周辺諸都市においてもプロテスタントの牧師をカトリックの聖職者に入れ替えさせていた。しかしパーダーボルンをはじめとする諸都市は既に16世紀前半に受け入れていたアウクスブルク信仰箇条（1530年）を保持しつづけることを望み、「カトリックの統一典礼の代わりに自由な信仰実践を要求し」、いつでもどこでも望むときに礼拝を行なうことができると主張していた⁷⁾。

ディートリヒによるカトリック化が可能になったのは1604年4月のスペイン軍によるパーダーボルン占領によってであるが、そのディートリヒは、すでに16世紀末期にこの市に進出していたイエズス会のために学院を建て、1614年には大学を開設、イエズス会に委ねた。しかし22年にはクリスティアン・フォン・ハルバーシュタットに率いられたプロテスタント軍が侵入し、更に「冬將軍」と仇名されたプファルツ選帝侯フリードリヒ⁸⁾が凱旋將軍のように迎え入れられ、司教館や修道院をはじめ周辺一帯で略奪を欲しいままにし、イエズス会も市を追われた。クリスティアンが数ヶ月の占拠の後、脱出の遅れた2名のイエズス会神父を捕囚として市を出て行き、パーダーボルンは再びカトリック側の手に帰した。その後ケルン選帝侯フェルディナン

ト・フォン・バイエルン⁹⁾がパーダーボルン司教になる(1618)ことによって再カトリック化が本格化した¹⁰⁾。

その再カトリック化に際して中心的役割を担ったのがイエズス会であった。イエズス会のドイツ進出は1540年ケルンにおいて始まっていたが、17世紀に至るまでに各地に居館や学院を建設していた¹¹⁾。イエズス会はその創立に際しての誓いの第一に、教皇に対する忠誠とともに「キリスト教国と異教国とを問わず、いかなる地域にも進んで出発すること」を挙げていた¹²⁾。とは言え創立者イグナチオ・ロヨラはルターのことをほとんど知らず、その著作を読んでもいなかったとされ、時代の現実的出来事が会の創立に直接的影響を及ぼしたのでもなく、会の主たる活動目的がプロテスタントに対抗することにあっただけでもない¹³⁾。それにもかかわらず会がドイツにおいて、特にノルトライン・ヴェストファーレンにおいて重要な役割を演じたのは、その会員たちが厳密かつ効率的なプログラムと方法とによって人文主義的な教育をほどこされていたからであり¹⁴⁾、その会則・会憲の厳守が会員たちにその職務にふさわしい生活を実践させていたからである¹⁵⁾。同時にイエズス会が力を注いでいたのは、ギムナージウムや大学における青少年の教育であったからでもある。非合法的な関係を持ちながら、それを合法的結婚と称し、独身制に背いた生活を営んで恬として恥じない聖職者の少なくなかったカトリック諸教区においては¹⁶⁾、イエズス会による司牧活動が希求され、ヴェストファーレンにおいてもこの「新しい宗教的力の意義」¹⁷⁾が認識されていたのである。

そうした喧騒の中でやがてシュベールも活動することになるのだが、ひたすらイエズス会士としての修養を積みつつあった若いシュベールの前に大きなチャレンジの機会が訪れる。それが東洋への赴任を呼びかけるイエズス会総長

の回状であった。

(2)

その総長の呼びかけに欣然として応じたシュベーターたちが、宣教の実情についてどの程度のことを知っていたのか、筆者には想像するしてみるしかない。

イエズス会による東洋宣教はカトリック保護政策を推進したポルトガル王ジョアン三世が、設立されて間もないこの修道会に宣教師派遣を要請したことに端を発し、1542年にフランシスコ・サビエルがインドのゴアに到着したことに始まる⁽¹⁸⁾。ドイツのイエズス会がインド・中国への修道士派遣を決めたのがいつであるのか、筆者の調査は行き届いていないが、1617年1月のイエズス会総長による、豊かな実りの期待されるインド・日本への宣教のために燃えるような魂を募る、という回状がドイツの管区へも届いたことによって若い修道士たちの間に「宣教へのフィーバーが燃え上がった」と言われている。更にベルギーの同会神父が、ライン地方のイエズス会学院を訪れて、みずからの中国での体験と成功を語っていた⁽¹⁹⁾。

またサビエルがゴアから最初の書簡をローマのイエズス会宛に出したのは1542年9月のことであるが、その書簡がヨーロッパの各方面に与えた影響は非常なものであって、「パリ、ケルン、コインブラ、ガンディア等においても、大きな感激の波を作り出した」(『サビエル書翰抄』上巻 7頁)と言われている。イエズス会の創立メンバーの一人であり、東洋宣教の先達であり、当時イグナチオと並んで列聖運動が進んでいたサビエルの事跡がシュベーターたちにも伝えられていたと想像しても許されるだろう。

さらに想像を逞しくすれば、天正遣欧使節の日本人少年たちがローマで

華々しく迎えられたのは 1585 年 2 月のことであり、しかもこの使節の派遣を実現させたのがイエズス会のヴァリニャーノ神父であったのだから、たとえ彼らがドイツの土を踏むことがなかったとはいえ、この出来事の余韻が残っていたかも知れず、少なくともまったく知られていなかったことはないだろう。その上重ねて言えば、支倉常長たちがローマ教皇に謁見したのは 1615 年 10 月であり、彼らもドイツを訪れることなく、かつまた仲立ちになったのがイエズス会のライヴァル、フランシスコ会であったにせよ、あるいはむしろそうであったからこそ、この出来事についても何らかの情報がシュペーたちにも届いていたかもしれない。

そしてもし、サビエルの「この国民は、私が遭遇した国民の中では、一番傑出している」などという日本人についての報告（『サビエル書翰抄』下巻、26 頁）に接していたとすれば、キリストの戦士を自負する若い修道士たち、そして遠い異国で宣教に従事するという幼時からの希望がイエズス会入会の動機であると語るシュペーの心に火をつけ、先の総長の書簡によってライン諸管区で 1616 年から 20 年の間に計 222 名の応募があったというのも、むしろ当然の帰結であるかもしれない⁽²⁰⁾。

とにかくこの応募者の中にシュペーも混じっていた。1617 年 11 月の総長宛書簡でシュペーはその燃え上がるような熱誠を迸らせている。長くなるが引用しておく。

猥下、もう久しい以前から（いつのことか申し上げるとするなら、ほとんど揺り籠に揺られていた時からですが）私の胸の内で灼熱の炭のように燃え盛り、身を焦がすほどの熱い想いがあります。今日まではその想いを抑えつけ、様々な理由から隠そうとしてきました。しかし愚かにもその火

を灰の下に埋めようとする、かえって一層激しくまた熱く輝き、炎となって公然と燃え上がるのです。

いまではもはやその炎を抑えつけることはできません。胸襟を開いて、胸の奥底にあるものを打ち明けたいと存じます。いったい何を隠す必要がありますでしょうか。インドが、父よ、そしてあの遠い国々が私の胸に傷を負わせたのです。

たしかに私がまだ子供用胴着を着て遊びに夢中になっていた、今となつてははるか昔のことですが、その頃に何かわからぬ靈 Genius が、知らず知らずのうちに私の心をそちらに向けさせ、私をすっきり捉え、私の生涯の目的としてはっきりと示したのです。両親はどうにそのことに気付いておりました。私のまだ幼い心を傷つけずに私の想いを他のことに逸らすのは、親たちにとって難しいことではありませんでした。両親の愛がやさしく傷痕を包んでくれました。少し大きくなると、十分に癒されていなかった傷口が新たに開くの止めようもありませんでした。その傷だけが、他の何ものでもない、その傷が私をこの聖なる修道会に加入させたのです。

これまでの間私はこのことについて沈黙を守ってきましたが、目標から目を逸らすことはありませんでした。そしてたまたま、最近猊下が修道会の全員に宛て出された書簡を読み、そこでインドに言及されていたことが私の胸を改めて貫いたのです。私にはこのことを猊下に率直に申し上げ、私にこの傷痕を残した同じ槍が——アキレスの槍がテレフォスにしたように——治癒をもたらしてくれるように願うこと以外になす術を知りません。インドにおける使命に役立てられるようないかなる才能が私にあるか申し述べなければならないとすれば、何も思い当たることはありません——次のことを除いて、私の靈的生活の最初の日以来全ての祈りと思索とにおい

て希求してきたのは、あの十字架に架けられた方のためにはあらゆることに耐え、この世にあるあらゆるものの何一つ所有したり求めたりしないということ。このことがそのような使命に有用でありうるなら、お願い申し上げます。跪きキリストの愛に賭けて、この書簡によって乞い願います。私の心が久しい以前からそこにあるかの地に旅立つことが許されますように——とは言え神がお望みになる限りにおいてです、私の神に対する愛は真心からの熱いものですので、神の意志に従う私が身に引き受けられないようないかなる卑しい仕事、唾棄すべきこと、苦痛も考えられないほどであります。

ドイツ ライン河畔のヴォルムスにおいて 1617年 11月
 猊下にいと従順なる息子 フリードリヒ・シュペ (Spe)⁽²¹⁾。

シュペーはここでその宣教への想いが幼時からのものであり、その想いが彼をイエズス会士にさせたと言明している。しかし同時に両親はそのことを望んではいなかったこともここに窺わせている。

父の跡を継いで代官等の職に就くことが期待されていたのであり、それにふさわしい訓練を施されてもいたようである⁽²²⁾。エツェルババの小説では3人兄弟の末弟としてむしろ非常におとなしく、控え目で書物に親しむもの静かな少年、しかし同時にその胸奥には激しいものを秘めてもいたらしい少年として描かれてもいる。例えばある時兄たちと冬の森に騎馬で入り込み、兄の一人が狼の群に襲われて危殆に瀕した際に、一人先行していたシュペーがとって返し、兄と狼の間に猛然と割って入り、斧を振るって狼を打ち倒すという場面がある⁽²³⁾。ここに窺われるシュペーの姿にはイエズス会創立者でかつては勇敢な戦士でもあったイグナチオの姿が投影されているかのよう

ある。そしてシュペーが描き出したサビエルもまた「英雄」として称揚されている。だが先取りして言ってしまうと、このシュペーの願いは却下された。したがってサビエルを謳った詩は、いずれも渡航を断念させられた後で書かれたものと推定されるが、それだけにかえって彼の想い、敢えて言えば無念の想いが強く現れているように思われる。

(3)

1

奮い立つ英雄サビエルの

熱情は激しく、

新世界のことを想うと、

胸は張り裂けんばかりで、

大声で叫ばずにはいられなかった、

おお神よ、思いとどまることはできません。

4

それどころか海を越えて

荒寥たる魂をとらえるために、

よろこんでむき出しの投槍や槍の間を

矢と鋭い棒の間を

私は走り抜ける、猛々しい熊のように、

ひたすら魂をつかまえるために。

5

ああ、ああ、大きな苦痛がもたらされ、

なんと私の血潮は沸き立つことか。
すべての異教徒がキリスト教徒ではないから！
それゆえ神よ私をいっそう守りたまえ、
新世界に行かせたまえ
私の想いが強く求めているのです。

7

おお愛よ、すべての内臓を
いますぐ私の身体から奪え
海を越え、彼方の岸へ投げよ
新しい発見に役立つように。
私の心ははるかな日本へ届くだろう、
もし私が滅びることがなければ。⁽²⁴⁾

この7節から成る詩がいつ書かれたものか正確にはわからないが、これが収められている『黄金の徳の書』の初稿の成立時期や、シュペー自身の言葉から推測すれば、シュペーが宣教活動に従事していた1623年から28年頃と思われる⁽²⁵⁾。しかし成立時期を特定することは出来ないだろうし、そのことは本稿にとってはさして問題ではない。むしろシュペーがサビエルについて知り、この詩と後に触れるもう一篇のサビエルを取り上げた詩が構想されたであろう機会や環境こそ、この詩に込められたシュペーの想を知るには重要だろう。

この詩ではサビエル自身がその熱意を吐露しているのだが、第1節及び第5節に詠われているのは、異教世界のキリスト教化への使命感に支えられた激情である。その激情が第4節ではサビエルを槍や矢の間をかいくぐって熊

のように猛然と突き進む勇士にし、またここでは引かなかった第3節には「蒼白き死も／真紅の死も／私を恐れさせない」とあり、様々な危険に直面して「血と勇気が目覚める」ともある。殉教の死をも辞さない、あるいはむしろ進んで死地へ向かおうとする姿が浮かび上がる⁽²⁶⁾。

この詩に見られる槍や矢が宣教師を阻み、死の殉教をもたらすものとして提示されているのは一見して明らかである。しかしシュペーの書簡に見られる「槍」はそれとは違っている。そこには同時に「傷口、傷痕」、「胸を貫いた」などその槍やあるいは矢を想わせる語句も頻出する。シュペーの胸を貫き、傷痕を残したのは「何とも言えぬ霊 Genius」即ち神の選びに他ならず、シュペーにとっては神の愛にほかならない⁽²⁷⁾。これをローゼンフェルトは「キリスト＝キュービッド・モチーフ」と呼んでいるが⁽²⁸⁾、この神的愛と隣人愛のモチーフが、シュペーの著作と活動全体を貫いている。

そのことにはまたこの詩が置かれている『黄金の徳の書』の修養書としての基本的意図と性格が関わっている。

3部に分けられたこの書では、それぞれの部において信・望・愛という三つの基本的徳が扱われている。前掲の詩が挿入されているのは、問答形式によって構成されている第2部第16章の第16問においてであるが、それに先立つ第15問には次のようにある。「モーセとパウロの隣人に対する熱烈な愛をどう思うか。二人は他の人々がすべて地獄をまぬがれ、慈悲に恵まれるなら、命の書から抹消されることを、地獄へ追放されることを望んだ」⁽²⁹⁾。そして第16問では人の救いのためなら、そのようなみずからの魂をも犠牲に供しようとする神によって選ばれたものとしてサビエルが挙げられている。つまりここではサビエルの姿の内に信仰の道を歩もうとする信徒の倣うべき模範が示され、それにも増してキリストの戦士イエズス会士の理想像が託さ

フリードリヒ・シュペーのこと (1)

れている⁽³⁰⁾。だが、前引き個所に続いて「サビエルは海を越えて日本に渡り、そこで多くの異教徒に洗礼を授けたのです。そのことについて最近次のような詩を作った」と付け加えられているのを見ると、この詩には幼時からこうありたいと望んだシュペー自身の姿が、いささかの羨望とともに、投影されているのではないかと思われてくる。異教徒のキリスト教化に「血潮を沸き立たせている」のは、そのようにサビエルに語らせているシュペー自身である。

(4)

そのシュペーの逸る気持をより鮮明に表現しているのが、サビエルを謳ったもう一篇の詩である。

イエズス会士聖フランシスコ・サビエルが

日本へ渡航しようとした時のうた

1

遙か最果ての日本を

神の人サビエルが志した時、

すべての者が反対し、

言葉をもって襲いかかった。

風と嵐、海と波を

その眼前に描き出し、

災難や嵐や危険のことを

さまざまに言い聞かせた。

2

言うな、語るな嵐を

ああ風のことも黙していよ。

真の英雄も騎士も

そのような瑣事を気にとめることはない。

風や嵐は吹くにまかせよ、

愛の炎は吹かれて燃え上がる。

海や波は荒れるにまかせよ、

波こそ天にもっとも近いもの。

5

誰が海を、幾千もの荒々しい大洋を

越えようとしなないだろうか。

弓と矢を持ったものには

幾千もの魂が大事なのだ。

風の湿った翼が誰を

ためらわせ、恐れさせようか。

ひたすら魂を、この上なく美しい魂を

見出そうとする誰を。

6

ああ激しく、猛々しい波、

ああ荒々しく傲岸な風、

おまえたちが私を挫けさせることはない、

おまえたちにひるんだりはしない。

魂を、魂をこそ私は獲得するのだ。

船を追い立て、
 波を越えて疾駆し、
 岸にいたってようやくやむがいい。⁽³¹⁾

この詩においても語っているのはサビエルである。両方の詩とも第1節が3人称で語り始められ、サビエルの事績の客観的描写を想像させる。しかし先の「英雄サビエル」の詩では叙述は直ちにサビエルの胸奥深く入り込んで、サビエルの心情に密着し、その熱情が直接的・直情的に激しく表現されている。そこでは全7節42行の中に1人称代名詞類が21回用いられていて、サビエルによる直接話法が強く印象づけられる。

それに対してこの詩では全6節48行の中に1人称代名詞はわずか4ヶ所しか現れない。激情を吐露し、英雄的行為を強調する大袈裟な比喩的表現も極力避けられている。それだけこの詩の叙述は即事的・叙事的になっている。シュペーの心情は客観的描写の背後に隠され、沈潜させられているようである。だがそれによって先の「英雄サビエル」においてよりはるかに強く、シュペーの真情は刻みつけられていると言えよう。渡航を妨げる荒れ狂う風や波は単に自然の猛威や災難・危険を指しているのではない。むしろそれらにはシュペーの憧れに立ち塞がったものたちの姿が託されているのではないか。もしかしたらすでに1616年に北京に派遣されていた修鍊士時代の同僚だったシャル神父への対抗意識があったかもしれないが⁽³²⁾、自分の異教徒教化への燃える想いは、そのような妨害によって決して鎮められるものではなく、むしろ「燃え上がる」ことを吐露しているのだ。

先に神の愛を表すモチーフとしての槍や矢を指摘したが、この詩でもその弓矢が現れている。この詩の第3節では相変わらず槍や矢が、さらには剣、

銃、ピストル、砲も加えられているが、それらはキリストの戦士をひるませるものでもはやなく、かえって「兵士をたちをいっそう大胆にし／褒賞へ誘う」ものである。むしろそれらはかつてシュペーに傷を負わせた矢、魂を貫く愛の矢としてうたわれている。それを持ってシュペーは「この上なく美しい魂」を射抜くために波濤を越えて行こうとしている。

だがシュペーの熱い想いにもかかわらず、そのインドへの、はるかな東洋への宣教の願いは聞き容れられなかった。総長はシュペーの申し出を歓迎したものの、これ以上ドイツの管区からインドへ人員を派遣する余裕はない、ドイツのイエズス会には緊急を要する広い活動分野があることを理由に却下した⁽³³⁾。

サビエルがマラッカで日本人アンジロー（書簡では「アンヘロ」となっている）に遭遇して、日本行きを計画した際に、周囲の人々は海上の暴風雨や海賊など「危険極まる航海」を語っただろう。そのような人々のサビエルの決心に対する「驚き」に、サビエルは「この人々の信仰の薄いのを見てもっと驚いている」と感想を洩らしている（『書翰抄』上巻 335頁）。もしシュペーがサビエルのこの言葉を知る機会を得ていたとしたら、胸の内で快哉の叫びを上げたのではないか。

だが従順を旨とするイエズス会士シュペーはこの総長の意向に従って、その「熱意を用い、異端者の改宗に同じように献身する」道を歩まざるをえなかった。こうした挫折を振返って作られたこれらの詩には、シュペーの無念さと同時に、サビエルの姿を雄々しく描くことによって新たな使命に立ち向かおうとする自己への鼓舞が込められていたのであろう。

先の総長の書簡は1618年4月14日の日付をもっている。それから1ヵ月後の5月23日にはプラハにおいて皇帝の代官がボヘミアのシュテンデ（等

フリードリヒ・シュペーのこと (1)

族)によって窓から放り出されるという「窓からの放擲」事件が起こり、三十年戦争の発端となった。シュペーはその戦野にまさにキリストの戦士として立つことになったのである。

(5)

シュナイダーの『慰める人』は再カトリック化宣教のなかで襲撃によって負わされた傷を養い、自然の中で神を讃える被造物の声に耳を傾けるシュペー神父に、新たな任務に就くように促す使者の到着をもって終わっている。シュペー神父にとってもヴェストファーレンにとっても東の間の平和は終焉を告げる。

おお、穏やかな星々、静かな月
惨禍の重荷が汝らに同情を起こさせる。
わが苦しみは汝らの重石となり、
われとともに嘆き悲しむ。
別れを告げよう、永遠に
美しく燃える汝ら光に、
さらば、すべての光は消え、
汝らにまったき別離をわれは告げた。
暗い夜にわれは思いさだめる、
わが生涯を光なしに送ると、
ただ悲しみの歌のみが、わが生に伴い
たえずひびきつづけるだろう。(34)

この詩は元来は自己の罪を見詰める魂が、神から遠く離れてしまった闇の中に沈みつつも、「誠実に悔い改めるものは／なお慈悲を見出し」、ついには放蕩息子のように迎えられるだろうと神の愛に希望を託すことで終わる、いわば魂の遍歴をうたった18節から成るものである⁽³⁵⁾。

ここでこのように切り取られると、荒涼たる現実の中へ再び身を投じる際のシュペーの心境が映し出されているように思われてくる。最初の4行に続けて魂はなおも星々と月に夜にはその光の半ばを消さずに、「闇をなかば支配して」くれるように訴える。自然に囲まれてあたかも聖フランシスコのように花に舞う蜂や水の音やひばりの囀りに耳を傾けるシュペーのためらいを映しているのであろうか。だが同時に「もはや一筋の光も射さない」ことを悟り、「わがなすべきは／ひたすらに悲しみ／遊びや戯れを忘れること」と敢然と心を決める。この「遊びと戯れ」は現実の喧騒を離れて、静謐のなかで思索に耽り、詩作やあるいはみずからの詩に曲を付けることであったのか。シュペーが「まったき別れを告げた汝ら」とは、引用部のみからは光であると読み取れるが、インド渡航を願った書簡の中でも此岸的なものすべてを放棄する決意が語られていたように、それのみにとどまらず「遊びや戯れ」即ち詩をも含んでいるのかも知れない。そしてまた一切の断念が光の喪失でもあるのだろう。しかしたとえそうであっても「勇敢なナイチンゲール」が歌を忘れることはないだろう。よしそれが「悲しみの歌」であっても。

魂の闇は現実世界の「暗い夜」に投影され、その暗い夜が魂の叫びとして「悲しい歌」を生み出す。その悲しみの歌に伴われて、シュペー神父は支配者が替わるごとに新しい教えと古い教えとが目まぐるしく入れ替わるノルトライン・ヴェストファーレンの現実の中へ踏み出して行く。静思と行動とが微妙に結びついた、と言うよりむしろ静思の中に蓄えられた力が時として爆

発するかのように奔出する「行動の人」⁽³⁶⁾シュペーの生涯の一場面が捉えられている。

この襲撃前後のシュペーの宣教活動、魔女裁判批判、著作活動については稿を改めて眺めることとする。(この項完)

追記 本稿は成城大学教員特別研究助成費による研究成果の一部である。

フリードリヒ・シュペー 関連文献一覧

1. Spee, Friedrich: TN. Sämtliche Schriften. Historische-Kritische Ausgabe. 1.Bd. *Trutz-Nachtigal*. Hrsg.v.Theo G.M.Oorschot. Francke Verlag, Bern 1985
2. —: *Trutz-Nachtigal oder Geistliches Poetisch Lustwaeldlein*. Kritische Ausgabe nach der Trierer Handschrift. Hrsg.v.Theo G.M.Oorschot. Philipp Reclam Jung, Stuttgart 1991.
3. —: GTB. Sämtliche Schriften. Historisch-Kritische Ausgabe in drei Bänden.Hrsg.v. Emmy Rosenfeld. 2.Bd. *Güldenes Tugend-Buch*. Hrsg.v.Theo G.M.Oorschot. Kösel-Verlag München 1968.
4. —: *Cautio Criminalis oder Rechtliches Bedenken wegen der Hexenprozesse*. Mit acht Kupferstichen aus dern » Bilder-Cautio 《. Aus dem Lateinischen übertragen u.eingelt.v.Joachim-Friedrich Ritter. Deutscher Taschenbuch Verlag München 1986.
5. —: *Lyrik & Prosa*. Ausgw.u.eingelt.v.Winfried Freund. Schöningh Paderborn 1991.
6. Dimler, G.Richard: *Friedrich Spee von Langenfeld*. Eine beschreibende Bibliographie. Editions Rodopi Amsterdam 1986.
7. Engelhardt, Ingeborg: *Hexen in der Stadt*. Deutscher Taschenbuch Verlag München 1999.
8. Eschelbach, Hans: *Hexenkampf. Friedrich-Spee-Roman*. Veritas Verlag Bonn am Rhein 1939.
9. Herzog, Urs: » Augenblick 《. Zu Friedrich Spees *Liebesgesang der*

- Gesponß Jesu, im Anfang der Sommerzeit.* in: Gedichte und Interpretationen Bd.1.Renaissance und Barock. Hrsg.v.V.Meid, Philipp Reclam Jung. Stuttgart 1982, S.267-280.
10. Keller,Karl: *Friedrich Spee von Langenfeld (1591-1635). Leben und Werk des Seelsorgers und Dichters.* Buchhandlung Johannes Keuck 1990.
 11. Kemper,Hans-Georg: *Deutsche Lyrik der frühen Neuzeit.* 3Bde. Max Niemeyer Verlag Tübingen 1987.
 12. Meinke, Anja: „*In Gott ist alle Wollust*“. Zur Mystik Friedrich Spees. Peter Lang Frankfurt am Main 1994.
 13. Miesen, Karl-Jürgen (Hrsg.): *Friedrich Spee von Langenfeld (1591-1635).* Droste Verlag München 1991.
 14. Fülöp-Miller, René: *The Power and Secret of the Jesuits.* Transld. by F.S.Flint and D.F.Tait. George Braziller New York 1956.
 15. Oorschot, Theo G.M.van: *Neue Frömmigkeit in den Kirchenliedern Friedrich Spees.* in: Chloe. Beihefte zum Daphnis. Frömmigkeit in der frühen Neuzeit. Studien zur religiöse Literatur des 17. Jahrhunderts in Deutschland. Editions Rodopi Amsterdam 1984.
 16. Rener, Frederick M.: Friedrich Spee. »Arcadia« Revisited. In: PMLA 89 (1974) pp.967-979.
 17. Ritter, Joachim-Friedrich: *Friedrich von Spee 1591-1635.* Ein Edelmann, Mahner und Dichter. Spee-Verlag Trier 1977.
 18. Rösler, Andrea: „*Anfant terrible oder weltfremder Träumer*“ *Friedrich Spee von Langenfeld.* In: Vom Gotteslob zum Gottesdank. Bedeutungswandel in der Lyrik von Friedrich Spee zu Joseph von Eichendorf und Annette von Droste-Hülshoff. Schöningh Paderborn 1997.
 19. Rosenfeld, Emmy: *Friedrich Spee von Langenfeld.* Eine Stimme in der Wüste. Walter de Gruyter Berlin 1958.
 20. Schneider, Reinhold: *Der Tröster.* Präsenz Hünfelsen-Gnadenthal 1992.
 21. Schröer, Alis: *Die Kirche in Westfalen im Zeichen der Erneuerung (1555-1648).* 2Bde. Verlag Aschendorff Münster 1986.

22. —: *Vatikanische Dokumente zur Geschichte der Reformation und der Katholischen Erneuerung in Westfalen 1547-1683*. Verlag Aschendorff Münster 1993.
23. *Spee-Jahrbuch*. Hrsg.v. der Arbeitsgemeinschaft der Friedrich-Spee-Gesellschaft. Düsseldorf und Trier. 1.Jhg. 1994. Spee Buchverlag Trier.
24. レオン・パジェス: 『日本切支丹宗門史』上中下。クルセル神父校閲・吉田小五郎訳 岩波文庫 1991.
25. フランシスコ・デ・サビエル: 『聖フランシスコ・デ・サビエル書翰抄』上下。アルーベ神父・井上郁二訳 岩波文庫 1991.
26. フランシス・トムソン: 『イグナチオとイエズス会』中野記偉訳 講談社学術文庫 1990.

以上の内、本稿で主として参照したのは 1, 3, 8, 11, 14, 16, 17, 20 である。

[注]

- (1) ただし初出は ein Essay として, Friedrich von Spee, *Die Trutz-Nachtigall Auswahl*. Balduin Pick Verlag, Köln 1947 の巻末に置かれている。クリスティアン・ハルバーシュタット (Herzog von Braunschweig, Administrator von Halberstad, 1599—1626) とエルンスト・フォン・マンズフェルト (Graf Ernst II.zu Mansfeld, um 1580—1626) は、ともに三十年戦争時代にプロテスタント側に付いて各地を転戦した傭兵軍司令官。クリスティアンはハルバーシュタットのプロテスタントの監督 (Bischof) に選ばれたこともあったが、皇帝による承認は得られなかった。かれは固有の軍隊を保有し、ヴェストファーレン各地で略奪。カトリックのテイラー将軍に敗北を喫したのち、叔父であるスウェーデン王クリスティアン四世の軍のために軍備を整えたりしたこともある。
- (2) カイザーズヴェールト Kaiserswerth は現在はデュッセルドルフに属するが、元来はライン河の島。ここに 700 年頃イングランドの宣教師スートバート (Suitbert, また Suidbert, Swithbert とも。†713) がベネディクト会の修道院を創建。のちハインリヒ二世皇帝が館を設けた。1235 年砂の堆積により地続きとなる。17 世紀には要塞化された。(Geographische Namen

in Deutschland, Dudenverlag 1999 等による)

- (3) シュペー一族の系統は 12 世紀頃まで遡れるようであるが、詳細は省略する。古くから貴族の称号を頂いていたが、16 世紀になって男爵を表す冠が紋章に付け加えられた。なおシュペーの名は祖父や父に倣って Friedrich Spee von Langenfeld と記されたり、Friedrich von Spee とされたり、簡単に Friedrich Spee とされたりしている。またラテン語の Spes (希望の意) に似せて Spe と綴られたりしているが (シュペー自身もイエズス会総長宛ラテン語書簡では Spe と署名している。冒頭に引用したラインホルト・シュナイダーもこの綴りを好んで用いている)、本稿では煩雑を避けて Friedrich Spee とする。
- (4) 以下の記述は主として、Schröer, *Die Kirche in Westfalen im Zeichen der Erneuerung (1585-1648)*, Bd.II., III. Das Hochstift Paderborn による。
- (5) ゲーブハルトがプロテスタントになったことによってケルン大司教区評議会における多数派としての地位を失うことを恐れたカトリック側は、ゲーブハルトが破門されたのち、バイエルン公エルンスト・フォン・ヴィッテルスバハを後継者に選んだ。その両者の抗争にバイエルンの勢力強化を嫌った周辺都市が介入したが、エルンストを支援するバイエルン＝スペイン軍によって打破され、ゲーブハルトはシュトラースブルクに逃れた。
- (6) Ritter, S.15.
- (7) Schröer, Bd.II. S.119.
- (8) ボヘミア王マティアスの死後その後継者となったが、カトリック同盟軍に敗れ、プファルツを失い、オランダに逃れる。マンスフェルトがプファルツで勝利した際にその返還を望んだが、叶えられず。彼の名誉回復が三十年戦争のプロテスタント側の目的の一つであったとされる。
- (9) インゴルシュタットのイエズス会学院で養育された。叔父のエルンストの後を継いでケルン、ヒルデスハイム、ミュンスター、パーダーボルンなどの司教となり、それらの地域でトリエント公会議の決定の徹底と教会改革を推し進めた。
- (10) パルダーボルンは 17 世紀中頃までに、7 回の攻囲を経験し、4 回占領され、その都度皇帝軍によって回復されたものの、荒廃しきっており、人口は 800 人を数えるのみだったとも言われている。Schröer, Bd. II. S.156.
- (11) Schröer, Bd. II. S.6 には、ケルンの他にはヴィーン、ミュンヘン、インゴ

フリードリヒ・シュペーのこと (1)

ルシュタット、シュバイアー、ヴェルツブルク、マインツ、トリーア、バーダーボルン、ファルケンハーゲン、ミュンスターの名が挙げられている。

- (12) トムソン, 145頁。
- (13) Schröder, Bd. II. S.5.
- (14) イエズス会士の教育・修練のプログラムについては, Rosenfeld, S.14.
- (15) 会憲については, トムソン, 第9章参照。
- (16) Schröder, Bd. II. S.124ff.
- (17) Schröder, Bd. II. S.6.
- (18) ジョアン三世とイエズス会, サビエルとの密接な結びつきは, サビエルのジョアン三世宛書簡にも窺うことが出来る (『聖フランシスコ・サビエル書翰抄』)。またサビエル派遣にいたるまでの事情については, René Fülöp-Miller, *The Power and Secret of the Jesuits*. Translated by F.S.Flint and D.F. Tait. George Braziller, Inc., 1956. PP.199~201.に簡単な紹介がある。
- (19) Rosenfeld, S.16, S.21. ただし臍に落ちないのは, この総長の書簡が出された時には, サビエルはすでに中国沿岸の小島で死亡しており (1552年), しかも日本においては伴天連追放令 (1587年), 長崎の二六聖人殉教 (1596年) キリシタン禁教令 (1614年) が出された後であって, 日本・東洋とヨーロッパとの間の連絡に時間がかかった (サビエルは普通ポルトガルからゴアまでの船便が6ヵ月かかることはないといっているが, 天候によっては一年もかかったらしい。『サビエル書翰抄』上巻, 90頁) と言え, これらが伝わっていなかったとは考えられない。しかし17世紀末にいたってもなお日本や中国の状況改善のために財政措置がなされていたらしい (Schröder, S.196) ので, ドイツのイエズス会が日本についての程度正確な情報を得ていたのか, 現在の筆者にはわからない。
- (20) Rosenfeld, S.21.
- (21) Ritter, S.13. ラテン語による原文は同書154頁以下。
- (22) Rosenfeld, S.13には, シュペーが「ユンカー」として武人にふさわしく ritterlich 育てられ, 乗馬, 狩り, 社交を好んでいた, また後年神父になっても, 馬に乗って (シュナイダーの『慰める人』ではシュペーが愛した口バで出かけ, そのためもあつてか襲撃者の手を逃れきれなかったことが描かれているが) 村々を回り, 人々と交わったと記されている。

(23) Eschelbach, S.40ff.

(24) GTB. S.368f. 節の番号は便宜上筆者が付けたもの。

1

Xauerius der mütig Helt,
Hatt eyffer dergestalten,
Wan er gedacht der newen welt,
Sein hertz wolt sich zerspalten,
Vnd rieff dan laut gantz vnuerhelt,
O Gott, kan mich nicht halten !

4

Wan ich so gar auch vber Meer
Ein Seel wüst abzulangen;
Wolt gern durch lauter spieß vnd speer,
Durch pfeil vnd spitzig stangen
Durchlauffen, wie der wilde Beer,
Daß nur die Seel möcht fangen.

5

Ach, ach, wie bringt mirs grosse pein,
Wie springt mir mein geblüte,
Daß nitt all heyden Christen sein !
Drumb Gott mich noch behüte,
Laß mich zur newen welt hinein,
Darnach steht mein gemüthe.

7

O Lieb nim hin all ingeweid
Auß meinem leib zurstunde
Werffs vber Meer auff iene seit
Es dient zum newen funde:
Mein hertz doch käm in Jappon weit,
Wan ich schon gieng zu grunde.

(25) GTB の成立についての詳細は、その編者オールショットによって巻末に付された成立史参照。また同書の冒頭に置かれた「第一の回想。何故この書が書かれたか」でシュペーが2人の若い女性に定期的に与えた靈的指

導書を保存し、修練に役立てるよう指示している。この2人の女性は1628年にシュペーが正しい信仰について述べた書簡の受取人と想像されている。またサビエルのインド・日本渡航を取り上げたものには、この他に2篇あるが、いずれもその成立時期を特定するのは困難であるようだ。ただし、その内の1篇(本稿では取り上げない)は、1623年にケルンで刊行された『カトリック聖歌選集』に収録されているもので、詩人としてのシュペーの最初期のものと想定されている。また本稿で取り上げるもう1篇は、その表題に「聖フランシスコ・サビエル」とあることから、サビエルが列聖された1622年以後の成立であることが推定されるだけである。なおローゼンフェルトはこれら3篇の内容とその技巧的特徴から『選集』のものを一番古く、ここに引いた「英雄サビエル」を2番目、もう1篇を3番目としている。Rosenfeld, S.168ff.

- (26) そうした殉教の例としてシュペーは『黄金の徳の書』第1部第12章「信仰の業あるいはむしろ愛の業、そして信仰のための殉教の熱望」において、1月から12月までの暦形式で130余のイエズス会士の殉教を挙げているが、その122項と123項に1622年長崎でのいわゆる「大殉教」の際に処刑されたイエズス会士について記している。その内の122項日本人神父の例を紹介しておく。「1622年に我々の兄弟の中から9人が日本で命を失った。初めに8人がキリストのために生きながら焼かれた、あるいは炙り殺された。残りの1人は斬首された。セバスチャン・キムラ神父は焔の只中で2時間もいかなる苦しみのしるしも見せず、ついに息絶えるまで身じろぎもせず、悠然と直立したままであった。」この記事と123項のコンスタンツォ神父についての描写は、『ローマ殉教録』(1584年)に基づいたイエズス会神父フェターによる「イエズス会神父及び修道士の記録」(1599)によるとされているが(GTB. S.111, S.593ff.), レオン・パジェス『日本切支丹宗門史』中巻(223頁, 245・6頁)の記事とほとんど同じである。

- (27) グリムのドイツ語辞典によれば、Genius という語は16世紀に人文主義を背景にして移入されたもので、すでに詩人たちの用語にも取り入れられていた。それは人間の内にあり、神秘的なものを啓示し得る神的な声。キリスト教的には神による任命、聖別を意味し、詩人の間では神的存在を意味するものとして用いられていた。シュペーはもちろんこの語をラテン語として用いているのだが、Georges には、der über die

menschliche Natur waltende Gott 云々とあり、まさに自分の運命を決めるものとしている。

- (28) Rosenfeld, S.23.
- (29) GTB. S.367. 創世記 32 章 32 節で偶像崇拜に耽る人々を前にしてモーセが言う、「今もしあなたが彼らの罪をお赦しくださるのであれば (略) もし、それがかなわなければどうかこのわたしをあなたが書き記された書から消し去ってください」。またパウロについては、ローマ人への手紙 9 章 3 節を参照。「命の書」についてはヨハネ黙示録 3 章 5 節「私は彼の名を決して命の書から消すことなく、彼の名を父と天使たちの前で公に言い表わす」、あるいは同 13 章 8 節などを参照。
- (30) その理想像が奇蹟を行なう聖人像にまで高められるにはさして手間はかからないだろう。Kemper, Bd.2, S.168 には 1623 年以前の聖歌集の中ではシュペーの手になるものとして、「彼は多くの死者を甦らせ／多くの脚が曲がったものや麻痺したものを歩かせ」あるいは「海の怒りを／地獄の門を／一言で鎮まらせた」というキリスト自身とさえ比肩するような奇蹟を行なうものとしてサビエルが詠われていることが紹介されているが、その詩の全体は筆者未見である。
- (31) TN. S.94f.

Poetisch gesang von dem H. Francisco Xauier der gesellschaft IESV, als in Jappon schiffen wolte.

1.

Als in Jappon weit entleghen
Dacht Sauier des Gottes Man,
Alle waren ihm entgegen,
Jhm mitt worten fielens an.
Wind, vnd Wetter; Meer, vnd Wällen
Jhm für augen mahltens dar,
Redten vil von vngefallen,
von gewitter, vnd gefahr.

2.

Schweiget, schweiget von gewitter,
Ach von winden schweiget stil:
Nie noch warer Held, noch Ritter

Achtet solcher kinderspil.
Lasset Wind, vnd Wetter blasen,
Flam der Lieb vom blasen wächst:
Lasset Meer, vnd Wällen rasenn,
Wällen gehn zum himmel nächst.

5.
Wer wils vber Meer nitt wogen ?
Vber tausend Wässer wild,
Dem es mitt den Pfeil, vnd Bogen
Nach vil tausend Seelen gilt ?
Wen wil grausen vor den Winden,
Fröchten ihre Flügel naß ?
Der nur Seelen denckt zu finden,
Seelen schön ohn alle maß ?

6.
Eia starck, vnd freche Wellen,
Eia staur, vnd stoltze wind,
Jhn mich nimmer sollet fellen,
Euch zu stehn ich bin gesinnt:
Seelen, Seelen muß ich haben,
Macht euch auff ihr Höltzen Roß,
Müset vber Wellen traben,
Nur von vfer drucket loß.

(32) Adam Schall von Bell (1592-1666). ケルンの貴族の家系の出身。1611年イエズス会入会。外国宣教には自然科学の知識が必要と勧められ、天文学を修める。中国に渡った後には Tan-Jo-Wan という中国名を名乗り、明・清両朝の宮廷で重用され、厚遇されたと言われる。なおローゼンフェルトは中国派遣を 1616 年のこととしているが、筆者が覗いたドイツ・イエズス会のホームページには 1619 年とあり、Brockhaus Enzyklopädie 1973 年版には 1617 年インド・中国に向けて派遣されたとある。いずれにせよ本稿の論旨にはさして意味を持たないので、便宜的にローゼンフェルトを採った。

(33) シュベールの出願から約半年後にローマの総長がヴォルムスのシュベールの

上司に宛てた書簡には就中、次のような文言が見られる。修道会はドイツ国内において広範な活動領域を有し、そこから必要とされる活動力を割くことは出来ないこと、シュペーにはこのドイツと言う耕地を耕すべく、その熱意を用い、異端者の改宗と同じように献身することによって、インドで働くのと同じような報酬を神から得られるであろう。Rosenfeld, S.23f. 及び Ritter, S.14.

(34) R.Schneider, *Der Tröster*, S.36.

(35) この詩は『勇敢なナイチンゲール、あるいは靈的詞華集』と題された全52篇を含む詩集の第15番目に置かれた作、18節から成る「深く罪におののく心の懺悔の歌」の第12節の最初の4行と第14節とを結びつけたものである。全体を挙げるには長すぎるので13節を加えた3節のみを掲げておく。TN. S.77~82.

Bußgesang eines recht zerknirschten Hertzens

12

O Sternen still, o stiler Mon,
Des Elends last Euch dauern:
Mein Leyd euch last zu hertzen gan,
Mitt mir thut kläglich trawren:
Ach haltet ein
Den halben schein,
Euch halber thut zerspalten:
Vertrett zu Nacht
Nur halbe wacht,
Last finsternuß halb walten.

13

Ja freylich, freylich gar, vnd gantz
All augen thut beschliessen,
Verleschen allen Schein, vnd Glanz,
Kein eintzen Straal mehr schiessen.
Zur Rew, vnd Leyd
Jch bin bereit;
Ade Son, Mon, vnd Sternen:
Nur trawren gar

Jch muß fürwar,
Vnd Spiel, vnd Schertz verlehren.

14

Adé, dan ein- vnd abermahl,
Ihr Liechter schön gezündet,
Adé, verleschet alle Straal;
Euch gantz hab auffgekündet.

Jn dunckler Nacht,
Jch bin bedacht
Mein tag ohn tag volbringen;
Nur trawrgesang,
Mein lebenslang
Bey Mir soll stäts erklingen.

(36) Rosenfeld, S.32.